

鋼の天下の道 成り上がりからの

小説

平野暁彦

鋼の天下 ～成り上がりの道～

内容

鋼の天下 ～成り上がりの道～	1
プロローグ	4
序章：叩き上げの旋盤工	4
工場の門をくぐる	4
職人たちの世界	7
ライバル関係の始まり	8
初めての加工と測定	10
若手職人の苦悩	13
工場の鼓動	16
初めての仕事	18
第一章：技能の兵法	19
旋盤職人への第一歩	20
旋盤職人への決意	22
初めての失敗と再起	23
失敗からの再起	26
夜の旋盤と恩師の言葉	28
技術の積み重ねと覚醒	30
ライバルたちの反応	31
技能競技会への挑戦	32
第二章：職人の乱世	34
職人の世界に潜む壁	34
精密加工の現実	35
旋盤工と研磨工の連携	36
ライバル同士	37
旋盤の精密加工	38
バイト研磨の重要性	38
切削条件の計算と実践	39
測定と結果	40
旋盤とフライス、職人の誇り	41
旋盤 vs フライス 精度対決	43
結果発表	43
旋盤とフライスの融合	44
加工の精度を極めるには？	44
旋盤とフライスの協力加工	45
フライス加工の限界を超える	46
加工の未来を見据えて	47
職人としての覚悟	47
このまま職人で終わるのか？	48
先輩たちの現実	49
新たな提案	49
次のステージへ	51
新たな挑戦	52
第三章：愛と野心の狭間で	52
出会いと葛藤	52
思わぬ返信	53
経済的な不安	54

職人の限界	55
現場を見渡すと見えてきた「打開策」	55
難削材加工への挑戦.....	56
手にした手応え.....	57
新たな視点	57
給料を上げる方法	58
高精度の特殊加工	59
難削材加工の第一歩.....	60
チタン合金加工への挑戦	60
収入アップの実感	61
次なる挑戦	62
難関加工への挑戦	62
難関加工の現場へ	63
最初の試練——インコネルの壁	64
第二の試練——仕上げの壁.....	65
功と評価.....	67
変化する評価と報酬.....	67
次なる目標——営業する職人	67
新たな価値を生み出す	68
特殊加工の価値.....	69
給料が上がる仕組み.....	70
さらなる挑戦へ.....	71
新たな壁.....	72
価値を生み出す職人へ.....	73
第四章：新たな挑戦	74
職人としての視野を広げる	74
仕事の価値を考える.....	75
仕事の流れを知る必要性	76
営業という選択肢	77
技術者としての新たな挑戦.....	78
営業の世界を知る	79
営業初日：取引先へ向かう	80
取引先での会話.....	81
技術者が営業を学ぶ意味	82
新たな可能性を求めて.....	83
営業と技術の融合	83
仕事の本質を理解する	84
美咲との会話——成長を実感する瞬間	85
新たな挑戦へ.....	86
第五章：戦略と決断	87
さらなる成長への壁.....	87
会社の変革を提案	88
社内の反発	89
予想外のピンチ.....	90
危機を乗り越えるために	91
新たな挑戦の始まり	92
新たな戦略の立案	92
高精度部品の独自開発	93
新しい業界への進出.....	93
IoTの導入による生産効率化.....	94
仲間たちとの協力	94

予期せぬ試練.....	95
美咲との会話—支え合う時間.....	96
挑戦の先にあるもの.....	97
第六章：鋼の天下をつかめ！.....	98
新事業の立ち上げ.....	98
製品開発の試練.....	99
初めての販売交渉—困難と挑戦.....	100
展示会の壁.....	100
企業はリスクを嫌う.....	101
企業の本音を探る.....	101
差別化戦略を考える.....	102
ついに突破口を見つける.....	103
初受注の喜びと責任.....	104
次の挑戦へ.....	104
企業としての成長—試練と飛躍.....	105
初めての納品—品質と納期のプレッシャー.....	105
予期せぬトラブル—部品の不良発生.....	105
問題の徹底分析.....	106
深夜の工場—誰もが納期を守るために動く.....	107
夜明けと達成感.....	108
初めての納品—そして評価へ.....	109
企業としての転換点—リピート受注と新規案件.....	110
佐伯工場長との対話—未来への決断.....	111
プロポーズ—決意の瞬間.....	113
美咲の変化.....	114
迷いを振り払う決意.....	114
プロポーズの瞬間.....	115
家族としての新たなスタート.....	115
未来への一歩—新たな挑戦の幕開け.....	116
設備投資の決断—工場の進化.....	117
社長への提案—5軸マシニングの導入.....	117
資金調達—経営の視点を学ぶ.....	118
導入決定—工場の未来へ.....	119
次世代の職人育成—技術を未来へ.....	119
鋼の天下をつかむために.....	120
次なる挑戦.....	120
新たな技術の開発.....	121
資金調達と投資の決断—経営の視点を持つ.....	121
経営陣との対話—技術と経営の交差点.....	122
重圧の中でのプレゼンテーション.....	122
藤堂社長の決断.....	123
新たな挑戦へ.....	124
藤堂社長の異変—変革のとき.....	125
託された役割.....	125
未来への決意—鋼の天下をつかむために.....	127
エピローグ.....	128

プロローグ

三和精機の工場は、街の外れにある静かな工業地帯に位置し、駿はここで職人としての道を歩んできた。最初はただ技術を磨くことだけが目標だったが、次第にもものづくりの本当の意味を理解し、技術を生かして会社を成長させることを考えるようになった。

駿の転機は、藤堂社長からの言葉だった。「君の技術を、もっと大きな形で活かしていくべきだ。」その言葉がきっかけで、彼は経営や営業にも目を向け、技術だけではなくビジネス全体を支える役割を果たす決意を固めた。

新たな挑戦として、産業機械向けの次世代部品の開発を提案した。耐久性と軽量化を兼ね備えた製品を作ることで、会社の競争力を高めることを目指した。これまで培ってきた精密加工技術を基に、さらに進化させるためには、新しい事業を立ち上げることが不可欠だった。

駿は、技術者としてだけでなく、経営者としての役割を果たす覚悟を決め、会社の未来を支えるための決断をした。次のステップに進むため、技術の進化と新たな市場への挑戦が求められた。

三和精機の未来は、駿の手の中にあった。

序章：叩き上げの旋盤工

工場の門をくぐる

「ここが、俺の働く場所か……。」

駿は足を止め、目の前にそびえる工場の建物を見上げた。

三和精機株式会社。

従業員 20 名ほどの町工場。だが、その小さな工場には、旋盤やフライス、マシニングセンタなど、多様な加工機械が並び、精密な金属加工技術を駆使して産業機械や自動車部品を生み出している。

駿は、この工場の門をくぐることになるとは、ほんの数か月前まで思いもしなかった。

高村駿(たかむら しゅん)、22 歳。

身長 175 センチの中肉中背。

学生時代は特に目立つこともなく、派手な遊びとも無縁だったが、何かに夢中になるととことん突き詰める性格をしていた。手先が器用で、プラモデルやバイクのカスタムに没頭するのが趣味だった。ものづくりに興味はあったが、明確な進路は描けず、ただ漠然とした憧れを抱いていた。

工業高校の機械科を卒業し、地元の工場に就職したものの、仕事は単純作業の繰り返しだった。

「部品を機械にセットし、ボタンを押すだけ。」

そんな毎日に飽き飽きしながら、一年が過ぎた。

そんなとき、友人から三和精機の名を聞いた。

「三和精機？ 聞いたことないな。」

「お前、あそこはすごいぞ。旋盤もフライスも、全部一人前にこなせる職人ばかりだ。」

その言葉に駿の胸がざわついた。

職人の技が磨かれる環境——それは、駿が求めていたものだった。

「ただの作業員じゃなく、本当に技術を学べる場所かもしれない。」

そう思い、思い切って三和精機の求人に応募した。

面接で出迎えたのは、社長の藤堂雅史(とうどう まさし)、60歳。
鋭い目で駿を見据え、問うた。

「なんで、うちに入りたいと思った？」

一瞬、言葉に詰まる。しかし、自分の中にある「本気で技術を学びたい」という気持ちだけは伝えなければならない。

「もっと、自分の手で作る仕事がしたいんです。」

藤堂はしばし考え、隣に座る工場長の佐伯義男(さえき よしお)に視線を向けた。

「佐伯さん、どう思う？」

佐伯は腕を組み、駿を値踏みするように見た。

「技術を身につけるってのは、そんな簡単なもんじゃねえぞ。」

「覚悟はできてます。」

駿の真剣な表情に、佐伯は目を細めた。

「……まあ、実際にやらせてみないと分からん。お前に職人の素質があるかどうかは、現場が決めることだ。」

そうして、駿の三和精機での人生が始まった。

春の日差しが工場の屋根を照らし、わずかに暖かみを感じる風が吹く。

スーツではなく、新品の作業着に袖を通し、駿は三和精機の門の前に立っていた。

「今日から俺の職人としての人生が始まる……。」

そう思いながらも、胸の奥では不安が渦巻いていた。

門をくぐると、工場棟の奥へと続く通路の両側には、大小さまざまな工作機械が並んでいる。

小鳥のさえずりがわずかに聞こえる外の静けさとは裏腹に、工場内からは機械音が響き渡っていた。

鉄と油の匂いが立ち込める広大な空間。

天井の鉄骨には無数のクレーンが這い回り、重量物を吊り上げるたびに「ガシャン」と重々しい音を立てる。

窓から差し込む陽光が、工場内の機械に揺れる影を落としていた。

季節は春を過ぎたばかりだが、工場の熱気と油の匂いが入り混じり、早くも夏の気配を感じさせる。

床には金属粉が細かく散らばり、機械の周りには油で黒ずんだ作業着の男たちが忙しく動いている。

「ギュイイイイイイイン……！」

どこかで回転工具が金属を削る音が響き、青白い火花が飛び散る。

駿は喉を鳴らしながら、新品の作業着の袖を軽く引っ張った。まだ硬い生地が、工場の空気に馴染めていない自分を際立たせている気がする。

まるで異世界に迷い込んだような感覚だった。

「これが……俺の働く場所なのか。」

自分がここで、本当に通用するのか。

この空間で、やっていけるのか。

期待と不安が入り混じる中、駿はゆっくりと工場の奥へと進んでいった――。

奥へと進むにつれ、ずらりと並ぶ **NC 旋盤** の群れが目に入る。

それは、鉄の丸棒をチャックで固定し、回転させながら刃物で削る機械だった。無機質な鋼鉄のボディに、無数のボタンとデジタルパネル。切削音が響くたびに、細かい削りカス(切り粉)が宙に舞い、鈍い光を反射する。

「うお……すげえ……。」

駿は息を呑んだ。

まるで生き物のように、金属が形を変えていく。

「お前が担当するのは、この旋盤だ。」

低く響く声に振り向くと、工場長の佐伯義男が腕を組んで立っていた。

鋭い目つきと貫禄のある体つき。まさに職人の中の職人といった風格だ。

「旋盤の仕事は、ただ鉄を削るだけじゃねえ。精度 0.01 ミリの世界を極めなきゃならねえんだ。」

佐伯はそう言いながら、駿の肩をガシッと掴んだ。

「お前、覚悟はあるか？」

駿は、ゴクリと唾を飲み込み、力強くうなずいた。

職人たちの世界

工場の奥へと足を踏み入れると、旋盤だけではない、さまざまな職人たちの姿が目に飛び込んできた。

旋盤が回転する素材を削るのに対し、フライス盤は固定された金属をエンドミルと呼ばれる刃物で削っていく。

四角い部品を削り、穴を開け、旋盤ではできない加工を担うのがフライス工の役割だった。

「おい、新入り！ 旋盤ばっか見てねえで、フライスにも目を向けろよ！」

陽気な声が響く。

声の主は坂井和也(さかい かずや)、27 歳。

フライス工としての腕は確かで、工場のムードメーカー的存在でもある。

彼は油に染まったタオルで額の汗を拭い、駿に向かってニヤリと笑った。

「旋盤でどれだけ綺麗に削っても、結局仕上げはフライスで決まるんだぜ？」

「……そうなんですか？」

駿は思わず聞き返した。

旋盤加工すらまともに理解していない駿にとって、それがどれほど重要なことなのか、正直ピンときていなかった。

「そうだよ！ 旋盤がなけりゃ、素材を丸くできねえ。でもフライスがなけりゃ、寸法が完璧な四角い部品も作れねえ。つまり、旋盤はフライスの下請けってわけだ！」

駿はその言葉に引っかかりを覚えた。

「いや、旋盤がなかったら、そもそもフライスに回せる材料すら作れないじゃないですか？」

言った瞬間、駿はハツとした。

——まずい、これは生意気すぎるか？

工場に入ったばかりの新人が、ベテランに口答えするなんて、普通なら怒鳴られてもおかしくない。

だが、坂井は一瞬驚いたような顔をしたものの、すぐにニヤリと笑った。

「へえ、なかなか筋がいいじゃねえか。」

次の瞬間、バシッ！

鋭い衝撃が肩に走る。

坂井の手のひらが、豪快に駿の肩を叩いていた。

「お前、俺の言葉の意味が分かってねえな？」

「え……？」

「いいか、確かに旋盤がなきゃ、素材はできねえ。けどな、その旋盤加工がちょっとでもズレてたら、どれだけフライスで頑張っても、元の精度には戻せねえんだよ。」

坂井の声が、工場の機械音にかき消されることなく、駿の胸に重く響いた。

「旋盤がダメなら、フライスもダメなんだよ。」

駿は息を呑んだ。

旋盤とフライス——その関係性なんて、今まで考えたこともなかった。だが、今の坂井の言葉で、加工の流れがぼんやりと見え始める。

旋盤が正確でなければ、次の工程が崩れる。そして、フライスもまた、仕上げの精度を決定づける。

すべての工程がつながっている。

駿は無意識に手を握りしめていた。

「……なるほど。」

そう呟いた自分の声が、少しだけ誇らしく聞こえた。

ライバル関係の始まり

坂井の言葉に、駿は言い返せなかった。

けれど、負けたとは思わなかった。
むしろ、心の奥底からふつふつと何かが湧き上がってくるのを感じた。

—旋盤がズレたら、フライスもダメ？

ならば、完璧な旋盤加工をやってみせる。
フライス工が文句のつけようがない、誰もが仕上げたくなるようなワークを作り上げてやる—。

だが、それはあまりにも無謀な挑戦だった。
旋盤という機械の仕組みすら分からない今の自分に、そんなことができるのか？

「お前、加工やったことあんのか？」

坂井がニヤリと笑いながら尋ねてくる。

「……全くの初めてです。旋盤って、今日ここに来るまで実物すら見たことがなかったんで。」

坂井の表情が一瞬止まった。

「マジかよ。ってことは、レバーの使い方も、刃物の種類も、何も知らねえってわけだ？」

「はい。でも、これから覚えます。」

駿はきっぱりと言い切った。

坂井は呆れたように眉を上げたが、すぐに口元を歪めた。

「ハッ！ いい根性してんな。」

愉快そうな笑い声が、工場の機械音の中に溶けていく。

「だったら証明してみろよ。」

坂井が顎をしゃくった。

「お前の旋盤の腕で、俺が仕上げたくなるようなワークを作れってことだ。」

駿の胸の奥が熱くなった。

「……やってみせます！」

気持ちを奮い立たせるように、堂々と言い放った。

しかし、言った瞬間に焦りが込み上げる。

—旋盤の操作なんて、何ひとつ知らない。
レバーの動かし方すら分からないのに、どうやってまともな加工ができる？
刃物の角度、回転数、切削速度……知識も技術もゼロの自分に、何ができる？

不安が喉元までせり上がる。

だが、ここで怯んではいけない。
何かに挑まなければ、何も得られない。
生き残っていくためには、この場で戦うしかないのだ。

「お前、俺にケンカ売るつもりなら、まずはまともに芯出しできるようになってからだな！」

坂井が肩をバンツと叩き、豪快に笑った。

駿は、歯を食いしばる。

こうして、まだ何者でもない駿と、ベテラン職人・坂井のライバル関係は、未熟な状態のまま幕を開けた――。

初めての加工と測定

翌日。

駿は、初めて自分の手で旋盤を動かすことになった。
新品の作業着に袖を通し、工場の奥へと向かう。
そこには、昨日まではただ眺めるだけだった汎用旋盤が、どっしりと待ち構えていた。

「いいか、まずは汎用旋盤で削る感触を覚えろ。」

佐伯工場長が、がっしりと腕を組みながら指導する。

「旋盤には NC 旋盤と汎用旋盤があるが、お前みたいな初心者はまず手で操作する汎用旋盤からだ。NC 旋盤はコンピューター制御だが、汎用旋盤は手の感覚がすべてだからな。」

駿は緊張した面持ちでうなずき、言われたとおリワーク(加工する金属)を三爪チャックに固定する。

そして、慎重に刃物(バイト)を当てた。

「まずは切り込みを入れてみろ。」

駿は送りハンドルをゆっくりと回し、バイトをワークに押し当てる。

――削れる感触を確かめながら、慎重に。

しかし――

「……えっ、思ったより削れない……？」

バイトを当てればスリと削れるものと思っていたが、ワークはほとんど変化していなかった。焦りが生じる。

「これじゃダメだ」と少し強くハンドルを回した、その瞬間――

「バカ！ 力を入れすぎるな！！」

佐伯の鋭い声が飛ぶ。

「は、はい！」

だが、すでにバイトの角度が狂い、「ギギギギッ……！」という嫌な音が響いた。工場の空気が、一瞬ピリッと張り詰める。

「まったく、いきなりそんなに切り込むからだ。」

佐伯はため息をつきながら、駿の手元を見た。

「汎用旋盤はな、自分の手で送り量を調整しなきゃならねえ。NC 旋盤と違って、自動じゃねえんだから、金属が削れる感触をしっかり覚えろ。」

駿は冷や汗をかきながら、削ったワークを見つめた。

佐伯がワークを指で弾きながら、低い声で言う。

「今は汎用旋盤だから、お前の手加減次第でなんとかなる。だがな、これが NC 旋盤だったらどうなると思う？」

駿は言葉を失った。

「NC 旋盤はプログラム通りに刃物を動かす。もし今みたいに無理やり刃物を突っ込むような動作をさせたら――」

「……機械が止まる？」

「止まるか、最悪の場合、ワークがぶっ飛んで機械ごと壊れる。」

駿は背筋が凍るのを感じた。

「もしもチャックからワークが飛び出したら、誰かに当たれば大怪我じゃ済まねえし、機械が壊れたら数百万、下手すりゃ数千万の損害になる。加工中のワークや刃物に無理な力がかかって、主軸がブレたら機械はもう終わりだ。」

「……そんなに？」

「お前の『ちょっと力を入れすぎただけ』が、会社にとっては致命傷になるってことを、忘れるな。」

駿は、震えるような気持ちで自分の手元を振り返った。

「……すみません。」

「別に怒ってるわけじゃねえ。今のうちに体で覚えとけてことだ。」

佐伯はそう言って、旋盤のスイッチを切った。

駿は、改めて「この仕事の重み」を実感する。
加工技術とは、ただ鉄を削ることではなく、責任を伴う行為なのだ。

—削ることが、作ること。
—作ることが、支えること。

これを理解しなければ、一人前にはなれない。

その時、背後から声が飛んだ。

「おい、新入り。測定はしたのか？」

驚いて振り向くと、フライス工の坂井和也が腕を組んで立っていた。

「……え？」

「お前が削ったワーク、ちゃんと公差内に収まってるか測ったのかって聞いてんだよ。」

駿は慌ててノギスを手にする。

「ノギスで測って……え？」

測るたびに、微妙に違う数値が出てくる。
削りすぎたのか、それとも寸法に達していないのかすら分からない。

「お前な、ノギスは1/100mmの精度を正確に測るには向いてねえんだよ。」

坂井が呆れたように言った。

「ノギスは目盛りが0.05mm単位だからな。細かい測定もできるっちゃできるが、確実性に欠ける。精度を追求するなら、ちゃんとした測定器を使わねえとダメだ。」

そう言うと、坂井は棚からマイクロメーターを取り出し、駿に手渡した。

「これが、1/100mm(0.01mm)の精度を測れる測定器だ。」

駿は、おそるおそる測定を始めた。

「えっと……こ、こうですか？」

「ダメだ、力入れすぎ。ワークが潰れる。」

坂井が指を伸ばし、駿の手を軽く叩いた。

「マイクロメーターはな、一定の力で測るためにラチェットストップがついてる。これをカチツカチツってなるまで回すんだよ。」

駿は言われた通り、慎重に測定し直す。

「……0.012mm？」

「オーバーしてるな。」

「すみません……」

「まあ、最初はそんなもんだ。」

その時、佐伯工場長が戻ってきた。

「お、坂井。駿に測定を教えてくれたのか。」

「まあな。新入りが測れねえと、こっちの仕事にも影響するからな。」

佐伯は坂井の肩をポンと叩く。

「今後も、駿のことを時々気にかけてやってくれよ。」

「え、俺がっすか？」

「お前、フライス工だが、測定に関しちやっぴりやってるからな。駿にとっちゃ、いい先生になるだろう。」

坂井は苦笑いしながら肩をすくめた。

「おい、新入り、俺の手を煩わせんじゃねえぞ。」

駿は思わず頭を下げる。

「ありがとうございます！」

この日から、駿の本当の戦いが始まった――。

若手職人の苦悩

工場内では、ベテラン職人たちが無駄のない動きで作業を進める一方で、新人たちは必死に旋盤と向き合っていた。

その中の一人、藤井圭太(ふじい けいた)は、デジタルノギスを片手に苦々しく舌打ちをした。

「チツ……またズレたか。」

床には削りすぎた金属片が散らばり、藤井は汗を拭いながらノギスの表示を睨みつける。

その様子を見て、駿は思わず歩み寄った。

「……どうしたんですか？」

藤井は顔を上げ、新入りの駿を一瞥する。

「お前、新入りか？」

「はい、高村駿です。」

「藤井圭太だ。お前も旋盤か？」

「そうです！」

藤井は苦笑しながら、ノギスを握りしめたまま、深いため息をついた。

「この部品、寸法公差が±0.02mm 以内に収めなきゃならねえんだけど、どうしても 0.05mm ズレちまうんだよな。」

駿は藤井の手元を覗き込む。

「……削りすぎてる？」

「そうなんだよ！ 最後の一削りで、どうしても余計に削っちまう。」

藤井は舌打ちし、削りすぎたワークを手取る。

「慎重にやってるつもりなのに、仕上げの最後でオーバーしちまうんだよ。」

バイトの刃先を覗みつけるようにしながら、藤井は続けた。

「ちょっとでも切り込みすぎると、ワークは取り返しがつかねえ。けど、ビビって浅く削ると、寸法が足りねえ……。」

駿はしばらく考えたあと、恐る恐る提案した。

「送り量を変えたらどうですか？」

「送り量？」

「はい。最後の仕上げだけ、もっと細かくすれば……。」

藤井は、少し驚いた顔をした後、半ばヤケ気味にバイトを当て、慎重に削る。

「……できた！」

再びデジタルノギスを使って測定する。

「……19.98mm！ 公差内に収まった！」

藤井は大きく息を吐き、安堵の表情を浮かべた。

だが、駿はじっと藤井の測定器を見つめていた。

「藤井さん、それ……ノギスですよ？」

「ん？ ああ、デジタルノギスな。数値がデジタル表示だから、ミスも減るし正確に測れるぞ？」

駿は口を開きかけたが、その瞬間、不意に背後から声が飛んだ。

「おい、新入り。お前、それ藤井にちゃんと教えてやれよ。」

振り向くと、フライス工の坂井が腕を組み、ニヤリと笑っていた。

駿は少し戸惑いながらも、坂井の視線を受けて、意を決して口を開いた。

「藤井さん、ノギスって……実は 0.01mm の精度を正確に測れるわけじゃないんです。」

「え？」

「俺も最初、坂井さんに言われて気づいたんですけど、デジタルノギスは 0.01mm 単位で数値は表示されるんですけど、実際の測定精度はそこまで保証されてないんですよ。」

藤井はノギスのディスプレイを見つめ、眉をひそめる。

「でも、ちゃんと 0.01mm の数値が出てるぞ？」

「そう見えるだけです。ノギスの構造上、測定誤差がどうしても生じるんです。だから、0.02mm の公差が求められるなら、マイクロメーターで測らないとダメだって、坂井さんに教えてもらいました。」

藤井は不満げにノギスを見つめる。

「……でも、そんなに違うか？」

「違うんだよ、藤井。」

ちょうどその時だった。

「おい、藤井！ またミスってんのか！」

低く響く声が、工場内に鳴り響いた。

藤井はビクリと肩をすくめる。

「す、すみません！」

工場長の佐伯義男が、腕を組みながら藤井を鋭く睨んでいた。

「お前、いつまでそんなことやってんだ？ 測定すら正しくできねえようじゃ、まともな加工なんてできねえぞ！」

「……はい。」

「いいか、ノギスは便利な測定器だが、測定誤差がある。だから、0.02mm 以内の公差が求められるなら、最初からマイクロメーターを使うのが基本なんだ。」

藤井は悔しそうに唇を噛みながら、小さく頷く。

坂井が藤井の肩をポンと叩いた。

「おい藤井、お前もサボってると新入りに追い越されるぞ？」

藤井は苦笑しながら、「ハア、もう追い越されてるかもな……」と呟く。

「まだまだこれからだろ。」

坂井はニヤリと笑い、「じゃあな、俺はフライスの仕事に戻るわ。」と言って持ち場へ戻っていった。

藤井は唇を噛みしめながら、駿に向かって言う。

「……お前、最初からそんなに熱心だったか？」

「いや……なんか、やってるうちに、楽しくなってきました。」

藤井は少し笑い、「変なヤツだな」と呟いた。

駿はその言葉に少しだけ嬉しくなり、藤井と向き合う。

「俺、マイクロメーター、ちゃんと使えるようになります。」

藤井の決意に、駿は頷く。

この工場で生き残るために、技術を磨くこと。
旋盤工としての挑戦は、まだ始まったばかりだった。

工場の鼓動

工場には、技術とプライドが息づき、職人たちの苦悩と成長の物語が刻まれている。

旋盤の回転音。

フライスの切削音。

クレーンが重量物を運ぶたびに響く「ガシャン」という重々しい音。

それらが複雑に絡み合い、まるで巨大な生き物が脈打っているかのように、工場全体を包み込んでいた。

——機械が動く限り、この場所は生き続ける。

職人の手が止まらない限り、鉄はただの無機質な塊ではなく、「製品」として命を宿していく。

駿は、自分の立っている場所を改めて見渡した。

ここには、長年にわたって磨き上げられた技術が息づいている。

この工場で生まれた部品は、日本全国の工場へ、そして世界へと広がっていく。

その一部に、自分も関わることになるのだ。

ゆっくりと、目の前の旋盤に手を伸ばす。

鉄の塊のような機械は、古びてはいるが、堂々とした風格を放っていた。

使い込まれたその表面には、かすかに削れた跡が残っている。

「……この傷、なんだろう？」

指でなぞると、背後から佐伯工場長の声が響いた。

「それはな……この工場ができたときから、この機械が働き続けてきた証だ。」

驚いて振り向く。

「そんなに昔から？」

「ああ。ウチの初代社長が工場を立ち上げた時に、最初に導入した旋盤の一つだ。」

何十年もの間、この場所にあり、何万、何十万という部品を削り出してきた機械。

駿は、胸の奥がふっと熱くなるのを感じた。

これは、ただの鉄の塊じゃない。

ものづくりの歴史そのものなのだ。

工場には、この旋盤と同じように、何十年と現場に立ち続けてきた職人たちがいる。

彼らの手には、迷いが無い。

金属を削るその姿は、まるで鋼の意志そのものだった。

そんなベテランの一人が、油で黒ずんだ作業着の袖をまくりながら、駿の前で足を止める。

「駿、新入りができる仕事なんて、たかが知れてるが……。」

鋭い目が、駿をまっすぐ射抜く。

「どんな簡単な仕事でも、雑にやるやつは一生半人前だ。」

駿はごくりと唾を飲み込んだ。

「旋盤でもフライスでも、最初はただの鉄の塊だ。それが寸法通りの部品になるか、ただのクズ鉄になるか……。」

職人は回転する旋盤を見つめながら、静かに言葉を続ける。

「全部、お前の手にかかっているんだよ。」

駿の中で、何かが弾けるような感覚があった。

この仕事は、ただの作業ではない。
職人の手によって、鉄は命を吹き込まれる。
そして、その部品は、機械の一部となり、人々の生活を支えていく。

旋盤の音が響く。
フライスの刃が金属を削る。
工場の鼓動が、駿の心に刻まれていく。

「俺も……一流になってやる。」

静かに拳を握る。
ものづくりの世界に足を踏み入れたばかりの新人職人の決意が、工場の鼓動と重なって響いていた。

初めての仕事

この日、駿は初めての本格的な仕事を任された。
小さな丸棒を旋盤で削り、指定された寸法に仕上げる——シンプルに見えて、精度が求められる作業だ。

「お前にやってもらうのは、このシャフトの仕上げ加工だ。」

佐伯工場長が、一枚の図面を駿に手渡す。
そこには細かく寸法が記されていた。

直径 20mm、長さ 150mm、公差 ±0.03mm

たった 0.03mm。
紙の上では些細に思えるこの数字が、実際の加工では大きな意味を持つ。

駿は、手汗で少し湿った指先をズボンで拭いながら、旋盤の前に立った。
いつも眺めていた機械。
今度は、これを自分の手で動かすのだ。

「……よし。」

ワークを三爪チャックに固定し、バイトの位置を慎重に調整する。
スイッチを入れると、旋盤が低い唸り声を上げ、ゆっくりと回転し始めた。

駿は息を整えながら、送りハンドルを回し、刃物をワークに近づける。
緊張で、手の動きが硬くなる。

「ギュイイイイ……！」

バイトが金属に触れた瞬間、火花とともに細かな切りくずが舞った。
旋盤特有の振動が手元に伝わる。
削られた金属の表面は……

「……しまった。」

僅かだが、表面に微細な傷が入っている。
原因は、刃の当て方か、それとも送りの速度か。

「ダメか……。」

駿は、一度機械を止めてワークを外し、じっと見つめた。
まだ、機械を思い通りに操る感覚が掴めていない。

これが職人の仕事か——。

ただ金属を削るだけの単純作業に見えて、その実、ほんのわずかなミスが仕上がりを大きく左右する。

一流の職人たちは、無駄のない手つきで、迷いなく加工していた。

駿はそれを「すごい」と思っていたが、いざ自分がやる立場になると、そのすごさがどれほどのものが痛感できた。

「もう一度、やるしかない。」

駿はワークをセットし直し、再びバイトを当てる。
慎重に、慎重に。
削る音、手に伝わる振動、目で見える切りくずの形。
すべての情報を頼りに、少しずつ、正しい感覚を掴んでいく。

次第に、耳慣れなかった工場の騒音が、ただの雑音ではないことに気づいた。

旋盤の回転音——職人が削る精密な音。
フライスの切削音——金属を削り出すリズム。
クレーンの「ガシャン」という音——工場全体が生きている証。

それらは、無秩序なノイズではなく、この工場が動いていることを示す“鼓動”だった。

——ここは、俺が生きるべき場所だ。

挑戦する価値がある。
積み重ねるべき技術がある。

駿は深く息を吸い込み、静かに拳を握った。

第一章: 技能の兵法

旋盤職人への第一歩

「旋盤はただ鉄を削る機械じゃねえ。削る順番、刃の当て方、回転速度、送り量……全部計算しなきゃいけないんだね。」

この言葉が、逃げるのこびりついて離れなかった。
入社当初、坂井に言われた言葉。

——でも、今は違う。

入社して三カ月が経った。
駿は NC 旋盤の前で、慎重にダイヤルゲージを当て、ワークのコアブレを確認する。
だが、どれだけ微調整しても、寸法公差の範囲に収まらない。

「くそっ……なんでだよ……！」

焦るほどに、手元が狂う。
芯ブレはますます心配し、寸法はどんどんズレていきます。

「おい、新入り！そんなに睨んじゃあ、鉄が泣くぞ！」

陽気な声が響いた。

振り向くと、そこにはフライス工の坂井和也が、腕を組んで立っていた。
工場のエース、27歳。
旋盤と対をなすフライス盤を操り、精密加工を得意とする男だ。
自分の作業を終え、駿の苦戦ぶりを面白く見ていた。

「芯出しでそんなに時間をかけているようじゃ、いつまで経っても職人にはなれねえぞ？」

駿は悔しさを滲ませながら、負けじと強がる。

「わかってますよ……！」

「ハッ、さっきも言ってたよな？ 旋盤はただ鉄を削る機械じゃねえって。」

「……っ！」

まさか、三ヶ月経っても同じことを言われるとは——。

「なら、コツを教えてやるよ。」

坂井はそう言うと、駿の手からダイヤルゲージを選んだ。

「あっ、勝手に……！」

「いいから見てろ。」

必要とする間もなく、坂井の指先が先に動いた。
その所作には、一切の無駄がなかった。

「速いか？旋盤の芯出しは、100分の1ミリ単位。だから、最初のセットアップで大まかにゼロに定めるのがコツだ。」

ダイヤルの針が、途方もなく揺れる。
坂井は、旋盤の手回しハンドルを巧みに操り、少しずつ針の振りを小さくしていく。

「お前は細かく考えすぎなんだよ。最初に大まかに合わせれば、あとは微調整するだけでいいんだ。」

駿が苦戦していた作業を、坂井はほんの数十秒で終わった。

「ほら、これで芯ブレは0.005ミリ以内に収まったぜ？」

「……簡単に……？」

「簡単じゃねえ。俺は10年やって身につけた技術だ。」

駿はびっくりした。
同じことをしているはずなのに、結果がまるで違う。

「職人の世界じゃな、早いのも技術のうちなんだよ。時間をかけて正確なものを作るのは当然。でも、時間をかけずに精度を出せるのが一流の職人ってやつだ。」

坂井は旋盤の側面をポンと鼓動、駿の目をまっすぐに見た。

「お前、旋盤を極めたいんだろ？」

「……はい。」

「だったら、フライスのことも知ってねえとダメだぞ？」

「え？」

「最初にも言ってたよな？旋盤だけできても、エリートにはなれねえってことだ。」

確かに言われた記憶はある——だが、そのときは深く考えなかった。

「旋盤でどれだけ精度を出しても、最後の穴あけやミーリング加工で寸法が狂ったら、台無しだろ？」

駿は、ハツとした。
旋盤とフライの関係——。

「俺のフライスは、お前の旋盤が正確なら、それを活かされる。逆もまた然りだ。」

駿はその言葉を噛み締めた。

「だから、お前も俺に負けないようになれよ。俺も、フライスでお前に文句を言わせない仕上げをしてやっからよ。」

駿の胸の奥で、競争心が燃え上がる。
最初に言われた言葉が、今になって意味を持ち始めた。

「旋盤はただ鉄を削る機械じゃねえ」——。

駿は前向き、前を向く。

「坂井さん、私……もっと上手くなります。」

坂井はニヤリと笑い、軽く言った。

「おう、見せてもらおうじゃねえか。新入りの成長をよ。」

ふと、坂井が呟いていた。

「いつか、お前が社長になった時にでも、この言葉を思い出してくれよ。」

「は？何言ってるんですか？」
職人の道を志したばかりの自分が、社長になるなんて想像もできない。

それにしても、坂井は真顔だった。

「お前、なんかやりそうな気がするんだよな。」

「そんな日が来るわけないっすよ。」

「さあな。でも、もしそうなときは、俺に仕事を回してくれよな？」

冗談めかした言葉。
だが、その奥にある「何か」が、駿の心を揺らした。

この世界で生きていくには、技術だけでなく、人との関係も大切なものかもしれない——。

旋盤職人への決意

坂井とのやり取りを経て、駿の中で確かな炎が灯った。

「いつか、あのレベルに追いついてやる。」

その決意は、ただの負けず嫌いから生まれたものではない。
坂井の動きには、無駄がなく、迷いもなかった。
彼の手は、旋盤を“操る”というよりも、まるで機械の一部となったかのようにだった。

それが“職人”というものなのか——。

駿は、改めて旋盤に向き直る。
今までとは違う気持ちだった。

ここには、まだ知らない技術が無限にある。
それを学び、吸収し、極めていく。
それが、職人の道——。

駿は深く息を吸い込み、静かにダイヤルゲージを手を取った。

「よし……やるぞ。」

鉄と油の匂いが鼻をかすめる。
耳を澄ませば、旋盤の低い唸りと、金属を削る音がリズムを刻んでいる。
この世界に、一步足を踏み入れたばかりの自分。
だが、この手で確かに掴み取ってみせる。

駿の職人としての戦いが、ここから始まった——。

初めての失敗と再起

旋盤の前で、駿はじっとワークを見つめていた。
額にはじつりと汗が滲み、手に握ったノギスの数値を確認するたび、背中に冷たいものが走る。

——指定寸法より、0.05mm 削りすぎている。

「……ウソだろ。」

震える手で、もう一度測る。
測り直す。
だが、何度試しても結果は変わらなかった。

(たった 0.05mm……それくらい、大したことないんじゃないか?)

けれど、そんな甘い考えが頭をよぎるたび、心の奥底で何かが警鐘を鳴らしていた。
この世界では、たとえ 0.01mm でも公差を超えれば、不良品になる。
0.05mm——それは、完全な失敗だ。

「どうしよう……。」

その時だった。
背後から、重く響く足音が近づいてくる。

「おい、新入り……」

振り向いた瞬間、駿の視界に佐伯工場長の険しい表情が飛び込んできた。鋭い目が、駿の手元のワークを一瞥する。

「これ、どうすんだ？」

駿はギクリとしながら、不良になったワークを持ち上げた。

「す、すみません……でも、たった 0.05mm じゃないですか？」

その瞬間、ゴツン！

鈍い衝撃が頭に響いた。
佐伯の拳が、容赦なく駿の頭を叩いたのだ。

「バカヤロウ！！ たった 0.05mm！？ ふざけんな！！」

工場内に怒号が響き渡る。
周囲の職人たちが、作業の手を止めてこちらを見ていた。

「お前、今自分がどんだけのことをやらかしたか、分かってんのか！？」

駿は、痛む頭を押さえながら、戸惑いの表情を浮かべる。

「でも……0.05mm くらい……」

言いかけた瞬間、佐伯が鋭く睨みつけた。

「バカ言え！！」

ゴンッ！とワークが作業台に叩きつけられる。
佐伯は凶面を掴み、駿の目の前に突き出した。

「この部品はな、精密機械の可動部に使われる重要なパーツだ。
たった 0.05mm ズレたら、どうなると思う？」

駿は何も答えられない。

「組み立てた機械が狂うんだよ！！」

佐伯の声が、工場の空気をさらに重くする。

「ウチで作った部品は、そのまま他の工場へ送られる。
そこで何百、何千という部品と組み合わせられ、一つの機械になるんだ。」

佐伯は間髪入れず、さらに畳みかける。

「お前のズレた部品が混ざったら、どうなる？」

駿は、唇を噛みしめながら答えた。

「……生産が、止まる……？」

「その通りだ！！」

佐伯の声には、怒りだけでなく、職人としての誇りが滲んでいた。

**「生産ラインが止まったら、工場全体のスケジュールが狂う。
そうなれば、何百万、何千万の損害が出るんだよ！！」**

駿は、じわりと背中に冷や汗が流れるのを感じた。
自分のたった 0.05mm のミスが、何千万もの損害につながる。

「それだけじゃねえぞ。」

佐伯はさらに低い声で続けた。

「不良品を出したら、お客様はどう思う？」

駿は息をのむ。

「……信頼を失う……？」

「そうだ。」

佐伯はワークを握りしめながら言った。

**「たった 1 個のミスが、お客様との信頼関係をぶち壊すことだってあるんだ。
一度失った信頼は、何をやっても簡単には取り戻せねえ。」**

工場内に、静寂が降りる。
駿は、立ち尽くしたまま、自分の未熟さを痛感した。

「お前、給料上げてえか？」

突然の問いに、駿は戸惑う。

「え……？」

「給料上げたいかって聞いてんだよ！！」

「……そりゃ、上げたいですけど……。」

「なら、こういうミスを無くせ！！」

佐伯は怒鳴るように言った。

**「不良品を出せば出すほど、会社の利益は減る。
利益が減れば、給料だって上げられねえんだよ！」**

駿は奥歯を噛みしめた。

(俺の失敗が、こんなに多くの人に影響を与えるなんて……。)

佐伯は、少しだけ声を落とし、静かに言った。

「悔しいなら、やり直せ。」

駿は、強く拳を握った。
このままじゃ終われない。

失敗したなら、やり直せばいい。
次は絶対にミスをしない。

目の前の旋盤が、まるで自分を試しているように見えた。

駿は深く息を吸い込み、佐伯の目を真っ直ぐ見つめて言った。

「……もう一度やらせてください。」

佐伯は、しばらく駿を見つめた後、無言で頷いた。

失敗からの再起

駿は、深く息を吸い込んだ。

新しい材料を旋盤にセットする。
手のひらには、じっとりと汗が滲んでいたが、もう迷いはなかった。

(今度こそ……絶対にミスはしない。)

ダイヤルゲージを慎重に当て、芯出しを行う。
先ほどの失敗が脳裏にちらつくが、今の駿は違う。
一つ一つの動作に、確信を持たせる。

焦るな。
急ぐな。
正確に――。

旋盤のスイッチを入れる。
「ギュイイイン……！」
低く唸る回転音が、工場内に響く。

駿は、呼吸を整えながら、慎重に刃物を当てた。
ほんのわずかな抵抗を感じる。
金属の削れる振動が、手のひらを通して伝わってくる。

(これが……切削の感触……！)

さっきまでの自分とは違う。

力任せに削るのではなく、金属の声を聞くように、バイトをゆっくりと送り込む。

——雑になれば、また削りすぎる。

——臆病になれば、寸法が足りない。

その狭間で、わずか 0.01mm 単位の調整を繰り返す。

駿は息を止め、全神経を指先に集中させた。

まるで、旋盤と対話するように——。

やがて、作業が終わる。

旋盤の回転が止まり、工場内の機械音が戻ってくる。

駿は慎重にワークを取り出し、作業台の上に置いた。

高精度マイクロメーターを手に取り、ゆっくりと測定する。

「……19.99mm。」

駿の心臓が、一気に高鳴った。

さらに別の箇所を測る。

「20.00mm。」

もう一度。

「19.98mm。」

……公差内に、完璧に収まっている。

駿は、無意識に唇を噛みしめた。

そして、静かに拳を握る。

(やった……！)

たったひとつの小さな成功。

それでも、駿にとっては大きな一歩だった。

職人の道はまだ始まったばかり。

失敗の先に、成長がある。

駿は、そのことを初めて実感したのだった。

夜の旋盤と恩師の言葉

工場の照明が落ちはじめ、静寂が場内を包み込んでいた。しかし、その中でただひとつ、旋盤の回転音だけが規則的に正しく響いている。

駿は機械の前に立って、じっと刃先を見つめた。昼間の失敗が脳裏に焼き付いていない。

研ぎ直したバイトを握り、駿は試し削りを繰り返した。しかし、少し削りすぎたのか、仕上がりに納得がいかない。

「えー、まだやってんのか。」

突然、聞こえない声が横から投げかけられた。

駿は目を見て振り返る。そこに立っていたのは、腕を組んだ佐伯義男工場長だった。

「……はい。もっと精度を出せるようになってきて。」

バイトを手に持つ、力がこもる。

佐伯はしばらく黙っていたまま駿を見つめていたが、戦場ポケットから一枚の紙を取り出し、無造作に差し出した。

「これはな、俺が若い頃学んだ『加工の極意』だ。」

紙には、切削条件の計算式、仕上げ面を美しくするためのバイトの当て方——長年の経験が反省された知識がびっしりと書かれていました。

「あなたが本当に職人を極める気があるなら、この知識を活かせ。」

駿は怖い手で紙を受け取り、深く下げた。

「……ありがとうございます。」

佐伯が満足そうに聞こえた、そのときだった。

「まだ仕事してるのか？」

工場の入り口から、穏やかな声が響いていた。

駿が顔を上げると、スーツの上を軽く羽織った男性がゆっくりと歩いて来る。気をとった様子はないが、落ち着いた風格がある。社長の藤堂だった。

「社長、遅くまでご苦労様です。」

佐伯が軽く会釈する。

「取引先の会食があつてね。戻るついでに工場の様子を見ようと思ったんだ。」

藤堂はそう言いながら、駿に視点を向けた。

「なるほど、夜遅くまで頑張るのはいいことだ。」

旋盤に目をやり、指で操作盤をなぞる。

「旋盤はいい機械だよな。」

駿は驚いたように開いた。

藤堂は思います、懐かしむように言いました。

「ちょっとだけ触ったことがあるんだよ。もちろん、職人には底までいけないけどね。」

そして、ふと、遠く見えるような目をしてしまいました。

「私の父は、職人として本当に優秀だった。でも、会社を継ぐ前に急遽なくなってしまったんだ。」

駿は息を呑む。

「だから俺は、職人ではなく経営者としてやっていくしかなかった。どうやって工場を回して、職人たちが腕を振るえる環境を作るか——それだけ考えてたんだ。」

藤堂の言葉には、長年の苦勞がにじんでした。

「でもな、駿くん。」

藤堂はゆっくりと駿に向いて直った。

「職人の技術がどれだけ優れていても、仕事が必要な意味がない。お世話は、皆さんが全力を出せる環境を作ることだ。」

「……環境を作る？」

駿が問い返すと、藤堂は軽く笑った。

「そうだ。仕事を引き受けて、利益を確保し、工場を動かす。そうすれば職人たちより良い仕事ができるし、技術を磨く時間もできる。」

スピン盤をポンと叩きながら、藤堂は続けます。

「だけど、それは社長だけの仕事じゃない。職人も、自分の技術をどう会社の成長につなげるかを考えてはいけない。」

駿の胸の奥に熱いものが込み上げた。

「……私にも、そういう視点が必要なんですか？」

「今はまだそこまで考えなくてもいい。まずは技術を極めることが先決だ。」

藤堂は優しく微笑んだ。

「でも、もし君が『ただの職人で終わりたくない』と思うなら、経営のこともちょっとずつ考えてみる
といい。」

そう言えば、藤堂はエナジードリンクを取り出し、一口飲んでから逃げるを見た。

「会社ってのはな、職人だけでもダメ、経営だけでもダメ。両方が噛み合っただけで初めて立つんだ
よ。」

駿は、その言葉をゆっくりと噛み締めた。

藤堂は時計を確認し、佐伯に軽く話しかけます。

「それでは、私はそろそろ帰りますよ。佐伯さん、頼んだ。」

「はい。」

藤堂は駿に向かって直り、少しだけ声を落とした。

「君に期待してるよ。」

駿はその言葉を心の奥に刻みながら、深く頭を下げた。

藤堂が去ると、工場には再び静寂が訪れる。

駿は、佐伯からもらった「加工の極意」の紙をポケットから取り出し、強く決めた。

(俺は、ただの工員で終わるつもりはねえ。)

技術を磨く。

経営を学ぶこと。

職人として、そしていつかこの工場を存在し続けること――。

駿は決意を新たに、再び旋盤に向けて直した。

「よし……やるぞ。」

この夜から、駿の成長は加速していく――。

技術の積み重ねと覚醒

駿の努力は、確実に実を結び始めていた。

かつては芯出しすらままならず、震える手で刃物を当てていた。しかし今では、その手に染み付いた感覚が迷いを消し去り、旋盤に刃を滑らせる瞬間、まるで機械と一体になったかのような感覚が駿を包む。

削りすぎることはない。バイトの種類、切削条件、それらが頭の中で瞬時に整理され、最適なセッティングがほぼ無意識に決まる。材料が違えばどうするべきか、それもすぐに判断できるようになった。

彼の成長に最も驚いたのは、かつて競い合っていたライバルたちだった。

「駿、そろそろ技能検定を受けてみる。」

佐伯工場長の一言が、駿の心に火をつけた。国家技能検定——それは熟練工の証明であり、合格には精密な技術が求められる。

試験では、寸法公差 $\pm 0.01\text{mm}$ 以内の精度を維持しなければならない。通常の加工なら $\pm 0.05\text{mm}$ 程度の誤差は許容範囲だが、検定ではわずかな揺らぎさえ許されない。

駿は、機械の前で思案した。

——切削速度を上げすぎると、刃が摩耗し、仕上げ精度が狂う。——切込み量を増やせば、工具の負担が大きくなり、加工面が荒れる。——だが、少なすぎても寸法の安定性を欠く。

どこが最適なのか。何が正解なのか。

駿は夜ごと旋盤に向かい、刃物を当て続けた。

削るたびに響く金属の音、手のひらに伝わる微細な震え、光を反射する切削面の美しさ——そのすべてが、駿の中で確かな技術へと変わっていく。

眠気を吹き飛ばし、無心で挑み続ける彼の姿は、まるで研ぎ澄まされた刃のようだった。

ライバルたちの反応

「おい、駿。お前、最近腕を上げたな。」

フライス工の坂井和也が、駿の仕上げたワークを手に取り、じっと見つめた。表面はまるで鏡のように滑らかで、マイクロメーターを当てれば誤差がほぼゼロに等しい。

「これ……お前、本当に加工したのか？」

隣で覗き込んでいた藤井圭太が、驚きに目を見開く。

「たぶん、これなら $\pm 0.005\text{mm}$ 以内に収まってると……すげえな。」

駿は少し照れくさそうに笑った。

「まだ完璧じゃないです。でも、確実に精度は上がってきました。」

坂井がニヤリと笑い、駿の肩を軽く叩く。

「おいおい、いつの間にそんなレベルになったんだよ。まあいいさ……お前の旋盤が完璧なら、俺のフライス加工も、それに負けないくらい仕上げてやるさ。」

駿の目が鋭くなった。

「……負けませんよ、坂井さん。」

二人の視線が交わる。静かな火花が散るような、職人同士の誇りを懸けた戦いの始まりだった。

技能競技会への挑戦

ある日、工場内で技能競技会の開催が告げられた。それは、社内の旋盤・フライス技術者たちが腕を競い合う大会だった。優勝者には会社から表彰と報奨金が贈られるという。

「お前も出てみろよ、駿。」 坂井が軽い口調で言ったが、その一言は駿の胸を大きく揺さぶった。

(俺なんかが……出場していいのか?)

自信がないわけではなかった。だが、周囲には熟練の職人たちが揃っている。自分がその中に混ざって戦うなど、思いもよらなかった。そんな時、脳裏に佐伯工場長の言葉がよぎる。

「技術ってのは、競い合ってこそ伸びるもんだ。」

駿はぎゅっと拳を握った。 「……やります。」

そう答えた瞬間、迷いは消えた。

競技会当日。

ルールはシンプルだった。与えられた図面通りにワークを仕上げ、その精度を競う。ミクロン単位の精度が求められる戦いだ。

「よーい、スタート！」

合図とともに、参加者たちは一斉に旋盤へと向かう。駿もまた、研ぎ澄まされた意識で作業に取り掛かった。

まずは芯出し。慎重に、正確に。次に粗削り。寸法の80%まで削り、仕上げの余裕を残す。そして仕上げ削り。工具の摩耗を考慮し、わずかに余裕を持たせる。

手元の動きは、かつての自分とは比べ物にならないほど洗練されていた。刃が金属を削る感触、微細な調整……すべてが研ぎ澄まされていく。

周囲の職人たちが思わず息を呑む。